

# 咀嚼・咬合論



著 明海大学歯学部非常勤講師 丹羽克味  
宮崎市開業 島基紀  
AB判 2色刷 223頁  
定価8,400円(本体8,000円+税)  
ISBN978-4-7624-0667-6

の製造です。  
中心位の自由度という考え方

ジョンソンは、著書の中でロングセントリックについて次のように述べています。

「患者さんが『先生が頭を後方に押したときには、歯がうまくかみ合うが、自分自身で閉じたときには前歯だけが当たる』と訴えている場合には、必要なロングセントリックを作成しなかったときにしばしば生じる、制限された咬合と同一ものになっている」……。さらに「ロングセントリックとは、中心位からの自由性をいうのであり、中心位での自由性をいでのではない」。

ロングセントリックとは、図103に示すように機能咬合面が構する対合歯の咬合面の一部を半円にし、この歯を自由に滑走できるようにしたものです。

試験の記述の「先生が頭を押したとき……前歯だけが当たる……」という現象は、これまで記したように、中心位の顎位設定に誤りがあり、下顎位として構築したことに原因していることは容易に想定されます。

次に「中心位の自由性……」の記述ですが、このようにことばの使い分けはできます。しかし実際は同じことです。それは中心位の自由性(DF)が必要なことを意味しているのです。なぜなら顎関節は機械的な構造ではなく、そこにはむしろ緩和感が存在します。この緩和感を咬合にもたらすことは、咬合面を自由に滑走させる範囲を有することです。そうすることによって顎関節は中心位のリラックス状態を保持し、結果安定することになります。したがってロングセントリックのような自由に滑走できる範囲を咬合面に形成することは、顎関節の生体構造のもつ動きとマッチすることになります。このような咬合面は、吸収した歯の咬合面と共通するものです。

## 中心位の水平的自由度

では中心位の水平的自由度とは、臨床的にどのような状態をいうのでしょうか?

側方咀嚼運動を行うと、作業側の下顎頭は外転し、非作業側の下顎頭は前下方に移動します。しかしよく初期の前方や側方運動では、非作業側の下顎頭が下顎頭内で水平に動けるわずかな範囲があります。この範囲内における下顎頭の動きを咬合面上でみると、作業側と非作業側が、ともにわずかに水平に前方や側方に滑走ができるのです。すなわち図104に示すように、顎関節における下顎頭と下顎頭の関節は橈腕のようにならなくてはなりません。むずかしく水平的な自由度(ガタ)が存在し、その自由度を咬合面に再現することが顎関節の設定にとって大きなことである」と考えています。

またこの自由度を咬合面についたからといって咀嚼機能を低下させることはあります。なぜなら、その咬合面は吸収した咬合面と同じだからです。

最後左右に自由に滑走できる咬合面を構築することは、顎関節の緩和な構造を咬合に反映していることになります。この咬合構造によって咀嚼能

## 単純・明解咬合論

- ◆「正しい咬合とは、臨床で真に必要な顎位とはなにか」、あらゆる症例に適用できる咀嚼運動理論(咬合理論)がはたして存在するのか長年悩んできた著者が、ようやく1つの結論に到達。
- ◆歯ぎしりや顎関節症の治療に関する咬合も、インプラントや小さなインレーの咬合も、まったく同じ理論で治療が可能です。
- ◆正しい咬合理論を臨床に適用してこそ、患者さんが満足できる治療につながります。

### Contents

#### Prologue すべての症例に適用できる理論の確立を

<b>基礎編</b> 咬合の確立と構成	Part3 咬合面の害	Part7 隣接歯の関係
Part1 咬合面は変化する	Part4 咬耗の功害	Part8 顎関節の機能
Part2 咬合面は、なぜ存在するのか	Part5 咬合性外傷の存在とは	Part9 中心位と中心咬合位
	Part6 咬合平面の形	Part10 中心位への誘導
<b>理論編</b> 新しい咀嚼運動理論	Part12 リンガライズドオクルージョン	Part15 かみ合わせの確立と安定
Part11 顎の動きは咬合面で決まる	Part13 理想的なかみ合わせ	Part16 咀嚼とは
	Part14 正常なかみ合わせの要件	Part17 新しい咀嚼運動論
<b>実践編</b> 新理論からみた臨床	Part19 かみ合わせの診断と治療	Part21 咬合器の役割
Part18 歯科治療のもたらすもの	Part20 かみ合わせの調整	Part22 プラキシズムの治療
		Part23 顎関節症の治療
<b>Epilogue 真の理論とは、すべての症例に適用できる理論</b>		

#### Epilogue 真の理論とは、すべての症例に適用できる理論

はごく自然な状態を維持することになり、それが顎関節の安定につながると思っています。吸収した咬合面は尚ほポイントセントリックではありません。

#### 中心位の垂直的自由度

これまで中心位の水平的な自由度の意義について、その臨床的な必要性を説明しました。中心位の水平的な自由度が存在するのであれば、垂直的な自由度は存在するのでしょうか。そのことについて考えてみたいと思います。

著者の中心位の定義をもう一度提示します。中心位とは、下顎頭が下顎窩内に最も安定した位置で、すなはち下顎頭の下頭窩内に位置するところで、咀嚼筋や脛筋が最も安定しリラックスした状態にある下顎頭と下顎窩の位置関係である、としました。リラックスした状態の顎位とは、すなはち中心位には許容される程の軽い振動があるとを考えることができます。

これまで中心位の1つが下顎静止位であることを説明しました。次に中心咬合位の観察をしてみます。中心咬合位は下顎安靜位から2~4mmかみ込みだところにあります。中心咬合位は下顎安靜位の下頭窩と下顎窩の位置関係と変わらないことを話しました。中心咬合位の観察における下顎頭と下顎窩の位置関係が下顎安靜位のそれと同じとすれば、中心咬合位も中心位の型の1つになります。

すなはち下顎安靜位から中心咬合位までの顎の動きが中心位ということになります。したがって「2~4mmの安靜空間が、中心位の垂直的な自由度」と考えることができます。

それでは中心位と中心咬合位では、なにが違うのかについてはPart9で説明しました。そのことを踏まえて、次に顎の動きと各顎位の臨床的な意味を考えてみます。

#### 顎の動きと顎関節の関係

図105から図110に示すように、顎の動きと顎関節の関係を図示します。

図105では、下顎頭は前下方に移動し、最大開口位では関節結節を越える位置まで移動しています。この開口位では關門筋の舌下頭筋は収縮し、反対に閉口筋である咬筋、内側頭筋そして側頭筋、さらに輪筋は伸展させられた状態です。

下顎安靜位では、下顎頭は下顎窩内の筋も安定した位置にあり、すべての咀嚼筋と輪筋はリラックスした状態にあります。

中心咬合位では、この位置の下顎頭と下顎窩は下顎安靜位と同様の位置関係で、下顎頭は下顎窩内の安定した位置にあります。

中心咬合位が下顎安靜位と唯一異なる点といえば、輪筋はリラックスしているのに対し咀嚼筋はある程度張りたっていることです。

側方咬合位では、中心位より後位になった咬合状態では、下顎頭は下顎窩を圧迫するよう後方に移動します。側頭筋の収縮、内側頭筋そして側頭筋の筋張りが始まっています。

#### 中心位という顎位

中心位は、私たちが嚥下を行う上で重要な重要な顎位です。その中心位といひ顎位の臨床的意義を理解することは、臨床の成長を決すること



図103 ロングセントリック

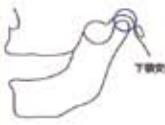


図104 中心位の水平的自由度の臨床的意義  
下顎頭が下顎窩内で水平に移動できる範囲が水平的自由度です。

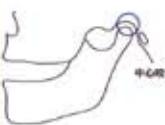
Part 9 顎位 咬合の確定と構成 69



閉口位



下顎安靜位



中心咬合位



最大開口位

図105 顎位 咬合の確定と構成

Part 9 顎位 咬合の確定と構成 70